

# 「医療的ケア児」共に生きる社会に

北星学園女子高（札幌）の2年生の有志12人が、たんの吸引や人工呼吸器などが日常的に必要な「医療的ケア児」の存在を伝える活動を続けている。1年前から、勉強会や訪問診療の見学、校内での写真展企画に取り組み、24日には札幌市中央区の札幌市民交流プラザ（北1西1）で写真展を開く。生徒たちは「ケア児や家族も暮らしやすい社会について考えて」と呼び掛けている。（高木緑）

## 北星女子高生、理解深める活動

医療的ケア児は、人工呼吸器や腹部からチューブで胃に栄養を送る「胃ろう」などが日常的に必要。道や札幌市によると、道内には700人近くいる。受け入れ態勢の整った保育園や学校が少なく、家族の負担の重さが課題となっている。医療的ケア児の在宅医療

を手がける医療法人稲生会（札幌）に勤務している同校の卒業生が「若い人にも知ってほしい」と同校教諭に話したところ、教諭も共感。教諭が関心のある生徒を募ると12人が集まった。生徒たちは昨春から、稲生会職員とほぼ毎月勉強会を開いたり訪問診療に同行し



## 勉強会や訪問診療見学 24日に札幌で写真展

写真展「みんな、とくべつなひとり」に向け、話し合う北星学園女子高の生徒たち

小学生の男児宅の訪問診療に昨夏同行した杉浦心虹さん（16）は当初、医療的ケア児をどこか「かわいそう」と思っていたが、目の動きや限られた言葉で母親と会話する姿を見て「笑ったり、少しわがままになったり。私たちと変わらない」と考えるようになった。片庭向日葵さん（16）は、学校に通ったり外出したりする際の家族の負担の大きさを知り、「ケア児も家族も生きやすい社会になるにはバリアフリー施設が少ない。もっと広がりしてほしい」と願うようになった。

昨年10月には、まず身近な人たちに現状を知ってもらうと、稲生会の協力で全国から集めたケア児と家族の写真500枚を展示する催しを校内で企画。5日間で生徒ら約150人が来場した。今月24日に札幌市民交流プラザで開く初の校外での写真展では、ケア児に関するQ&Aや生徒の思いをまとめた手作りリーフレットも配る。入場無料。生徒に協力してきた稲生会職員西理沙さん（27）は「多くの人がケア児と共に生きる社会を考える機会にしてほしい」と話す。